２０２２年7月3日　アモス7章１０～１５節、マルコ福音書6章1～１３節

説教『宣教の始まり』

高橋克樹牧師

イエスは安息日ごとにユダヤ教の会堂（シナゴーグ）を訪れ、旧約聖書の朗読と説教をしていたようです。普通、ユダヤ教の安息日の礼拝は、ヘブル語のモーセ五書や預言書が朗読されますが、会衆の多くはヘブル語の意味が理解できない者が多かったのです。当時、ユダヤ人も日常会話はギリシア語で行っていたので、ヘブル語が理解できない人が多かったからです。そのため礼拝運営者は会衆の中で旧約聖書に精通した人物に、朗読と読まれたテキストについての説明を依頼するのが慣例だったのです。この説明が説教になったのです。

イエスは、豊富な旧約聖書の知識を持っていました。おそらくは１２歳から３０歳に至る歳月をナザレの実家に住みながら日中は家具職人兼家造りの大工として働き、夜は地域の学友たち（ハベリーム）と律法について論議をする学習会に参加する日常生活をおくっていたと思われます。このハベリームはヘブル語で「友だち」を意味する言葉ですが、イエスの時代にイスラエル人の村々に起こった信徒の自主的な学習運動の名称でもあったのです。どの村でも仕事が終わったあとは、勉強熱心で真面目な青年が集まって律法の研究に専念し、律法がいまの時代にどのように適応するかの論議をしていたのです。こうして約２０年に及ぶ「自主的な神学教育」の研鑽ののち、イエスは故郷ナザレで公生涯に入ったものと思われます。シナゴーグで説教をすることはイエスにとって当たり前の行為でした。シナゴーグはユダヤ人の共同体にとって学校の機能を果たしていて、同時に礼拝の場でもあったのです。イエスが神の国の宣教を宣べ伝えるためにシナゴーグを専ら用いたのは、そこが礼拝と教育の場であったからです。

さて、マルコ福音書6章1～１３節の平行記事であるルカ福音書４章１８～１９節を見ていただくと、イエスが宣教を始めた理由がわかってきます。これはイザヤ書の引用です。『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を（アフェシス）、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし（アフェシス）、主の恵みの年を告げるためである』とあります（１０７～１０８頁）。これらの文言はイザヤ６１章1～2節、同５８章6節の自由な引用で、ここで重要な語はアフェシスです。この語は「解放」「自由」「赦し」と訳される言葉で、イエスの言葉（解放・自由→赦

し）と行い（癒し）を象徴的に表わしています。しかも、これらの３つの象徴的行為が『今日』実現しつつあることをこのテキストは示しているのです（４章２１節参照）。旧約聖書において預言者を通して語られていた神の救いが、イエスの言葉と行いにおいて実現しているからです。また、イエスのアフェシス（解放、自由、赦し）を受ける人々は地縁、血縁、民族に限定されないことも重要です。これによって、イエスの福音は異邦人を含めたすべての人に及ぶのです。

『主が恵みをお与えになる年』とは、神がイスラエルの貧しい者、苦しめる者に対して善意を示すヨベルの年のことです。１８節の『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである』は、主イエスが聖霊を受けたことと、神からこの世に派遣された理由を述べている個所です。１８節はイエスの宣教の第一声で、それは「主の霊がわたしに降っている」というものです。福音書記者ルカの視点から言えば、イエスこそが人々を神の祝福へと導く聖霊に満たされた存在であるということを強調した言葉です。主の霊がイエスに臨み、この世に遣わす神の目的は、このアフェシスを宣べ伝えることにあることは明らかです。イエスの生涯の終わりの十字架上においても、イエスは『父よ、彼らをお赦しください（アフェシス）。自分が何をしているのか知らないのです』（２３章３４節）と語っていることでもわかるように、ルカ福音書特有の言葉です。

ここでの「貧しい人にとっての福音」とは、捕らわれている人に解放を告げ、圧迫されている人を自由にする福音のことです。ただ、初期のキリスト教徒は自らを貧しい者と名乗っているところもあり、それは経済的に貧しいという自己理解のことだけではないのです。山上の説教で「心の貧しい人々は幸いである」と語っているのは、キリスト者は社会的な存在としては小さな者であるという自己理解を示したものなのです。パウロもしばしばエルサレム教会のキリスト者たちを「貧しい人々」と呼んでいます（ローマ１５章２６節、ガラテヤ２章１０節）が、それは当時「貧しい」という言葉が主として「神の言葉を畏れつつ聴く人々」のことを意味していたからです。『見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く』（イザヤ３５章５節など）というのは、イエスが目の見えない人たちの視力を回復させたとき、癒された人は、預言者イザヤが予見した神の救いの業にあずかる者であることを象徴しているのです。つまり、イエスの癒しの業が「異邦人を照らす啓示の光」として、ユダヤ民族の枠組みを超える役割を果たすというのです。ですから、イエスの弟子たちの使命は、自分の救いだけでなく、他者の光となって他者を救うことを視野に入れなければならないのです。

イエスが宣教の開始において、このイザヤ書の個所を読んだ意味は非常に大きい。ルカ福音書記者にとって、神の子であるイエスの宣教を通して、神の祝福と救いが異邦人や障がい者に届くことを告げ知らせる出来事であったからです。しかし、イエスがイザヤ書の言葉に基づいて世界を理解したことと、会堂に集まった者たちが考えていたことと全く異なっていました。マルコ福音書6章3節を見ると、イエスの説教を聞いた人々は『この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか』と言って、イエスが神から遣わされた神の子ではないことを口々に言ったのでした。会衆は大工の息子イエスが生まれ故郷で偉そうに旧約聖書を解説して説教をしていることに不快感を感じたのでした。いずれにせよ、イエスは『マリアの息子』と言われているので、その場にいた会衆はイエスの宣教をユダヤ民族の枠内で理解していたのです。それに対して、イエスの視野はユダヤ民族の枠組みを超えて全世界と異邦人に向かっているのです。

マルコ福音書6章冒頭で、イエスが故郷で受け入れられないことをわざわざ記録するのは、イエスの宣教がイスラエルの枠組みの中でしか理解できない故郷では受け入れられないことを示しています。イエスはイスラエルのみに神の祝福が限定されないことを宣言していたのです。神はすべての貧しい人々、すべての捕らわれの人々を祝福されるので、異邦人にも与えられる神の祝福の広がりを明らかにしたのです。

重い皮膚病を患っている人は、当時神の祝福から外れていると考えられている人たちでした。神の祝福から外れていると考えられていた人々をイエスは積極的に癒すのです。その癒しの業は神の御心を現わすものでした。こういう癒しの業を繰り返すイエスは、神の祝福を自分たちイスラエルの民族に限定された者と理解していた人々には、赦しがたい行為と映ったのです。ナザレの会堂でイエスを拒絶した人たちは、明らかに神の祝福を自分たちイスラエル民族に限定して理解していた人たちです。

このようにイエスは、神の祝福がイスラエル民族に限定されないことを示したうえで、１２人の弟子たちを宣教の場に送り出すのです。私たちもしばしばキリスト者以外の人を排除しがちです。キリスト教に帰依しなければ救いがないようなことを言いがちですが、イエスが神の祝福がすべての人に及んでいることを、その宣教において指し示されたように、私たちもすべての人に神が祝福を与えていることを宣べ伝える者として、私たちを祝福の伝道者として用いてくださるように神にお願いしたいと思います。